

國道八號線

金 森 誠 之

は し が き

甲州街道、今の名は八號國道を、八王寺市を過ぎて、甲府市へと、大垂水オキナグミの時を越すと、風光は一轉し、相模川の溪谷に沿つて、片阻道の、都人にはめづらしい眺めとなる、道は神奈川縣の北部をかすめて、與瀨を過ぎ、境川を渡つて、山梨に入る。

上野原町は其の縣界に接した、山梨縣下指折りの町で、此の附近唯一の貨物の集散地として、將又都人には鮎漁の名所として、古くから有名なる町である。

物語りはこの上野原を巡つて起る、昭和六年内務省は失業救済事業として、この八號國道の改良に手をつけ初めた、地圖を開いて、この國道を見るとき誰しも考へるのは上野原の改良である、境川より鶴川に到る上野原越へ上り七十米、下り五十米、而かもくねりくねつた大迂曲で、直線距離二軒半を、其れに倍する四軒にもなつてゐる。誰しもこれには國道は上野原を止めて、其の南部島田村を過ぎる事を想ふ假令、その爲めに、隧道を作るにしても。

かくては古くからの上野原は亡びる、町の人々は誰云ふとなくこの意見に驚かされて、必死となつて國道上野原通過を叫んだ。かくて山梨縣會滿場一致の國道上野原通過の決議となり、貴衆兩院は其の請願を託し、この建議案の通過を見た、然し八號國道は上野原のみの國道でない、誰しも地圖を擴げて感ずるが如き状態にありとすれば、上野原には國道を通すべきでない。

然るに昭和九年十二月、上野原に國道を通じて改良すべく、内務省の告示を見た。蓋し技術はかくあらしむべく餘義なくせしめたのであつた。其の理由の一つは、島田村を過ぎて、隧道を貫くべき個所に大地すべりがあつて、到底施行し得べくもない、其の二は上野原を通過するも適當の路線を選べば、一軒以上其の距離を短縮し得べきを其の測量から定め得たことであつた。改良工事は現に日々着々進んでゐる、この工事から一つの物語りが生れた。

上野原の東北に小高い臺地がある、南を受けて、麥の若芽は青々と、のどかな春の日を受けてゐる。

その臺地には今日はどうしたのか大勢の人ばかりである、そうして、尙あちら、こちらの家々から續々と人々がかけて出して、其の臺地に向つて走つてゐる。犬までが何も知らずに、人々の後を追つてゐる。

國道はそれ等の人で通れなくなつた、トラックが二、三臺猛烈にクラツションを鳴らしてゐるが、次から次へと國道を横切つて走る人達のためにも仕方がない。

巖村から鴨川を渡つて、上野原町へさしかゝつた一臺の立派なセダン、東京番號をつけてゐるからには、ドライブにでも來たのであらう。景色を見る爲めに時々車を止めては走りなどしてゐる。

その車もこの人々のために動けなくなつた。

「何でしよう降りて見ない？」

車の中には、洋装がピツタリ身についた、まだ二十前であらう。モダンなお娘さんと、其のボーイ・フレンドとでも云つた恰格の三十前後の青年とが乗つてゐる。

「大變な人ですね、車が動けないんだから降りて見ましよう」

質朴な田舎人に混つて、毛色の變つた二人もかけ出した。

「あらつ！」

二人が手をとる様にしてまだ十歩も走らないとき、娘は、人混みの中から、とある人を見つけて、思はず驚きの眼を見張った。

「どうしたんです？」

青年は不審な顔をして娘の顔を見る。

「山田さん此處なんて云ふ所？」

「上野原ですよ」

「上野原ですの……上野原つてこんな景色のいゝ所だつたの……」

「それがどうしたんです」

話の終らぬ内に娘が見て驚いた青年も娘と顔を會はして一寸驚いた様子であつたが何げなく近づいて來た。

「妙な所でお眼にかゝりますね」

娘は一寸てれた様であつたが、

「あのう、御紹介致します、こちらは父のよく御懇意に願つてゐます、技師の奈良さん、こちらは、お友達の見さんの山田さんです」

二人は軽く頭を下げる。

「今日山田さんにドライブに連れて頂いたの——」

上野原つてとてもいゝ所ですのね、妾こんな所ならば、もつと早く來れば良かった——

そして何？　こんなに大勢の人が？」

「活動寫眞のロケーションです、僕の工場を借してやつてゐるんです」

「そう、見ましようよ」

三人が人に推されながら、ロケーションの方へ向ふ。

二

「じゃ行き初めますよ——」

松田君もう一寸レフを細田さんの後にかけて——」

監督は、大きなメガホンを手にしながら、色々と指圖をしてゐる。

「ハイッ!!」

カメラのクランクが動き出した。

細田さんと呼ばれた美しい女優は田舎娘に装ひ、技師になつた若い男優と、それに八つばかりの小役との芝居らしい、小役は、ぶぶぬれになつた着物を來てゐるので見物の同情を集めてゐる。

「それ細田さん、芳川君の顔を見つめて、そうく、「まあ良かったわ」……それ照坊、下を向いて小聲で、「つまらないなあ……姉さんほんとうに可憐さうだなあ……」ハイッ!!」

「これでお仕舞だ、御苦勞さん——」

見物はぞろ／＼と歸り初めるのもあれば、まだ俳優に見とれてゐるのも居る。

「奈良さん私達と一所にドライブしない」

娘は撮影が終ると技師に呼びかけた。

「冗談じゃない僕は仕事の最中だよ、お二人でいつてらっしゃる」

冷かに答へて、

「ではさよなら、皆さんに宜敷」

と工事場の方へ立ち去らうとした。

「あらつまらないわ、切角こんな所でお眼にかゝれたのに直ぐお別れしてしまつては——」

娘と云ふのは、さるガソリン會社の重役の娘で、芳子と云つて奈良との許婚であるが、頗るのモダン・ガールで、活
動寫真だ、ダンスホールだと遊び廻るのが好きで、結婚の式を擧げてはとの奈良の希望もあつたが、田舎ではとても毎日
がやりきれないと、擧式を延ばし／＼してゐたのであつた。

今日相模川溪谷へドライブに来て、美しいと見た風光はつまらないと嫌つて居た田舎である事を初めて悟つた。

「僕はいつでも此處にゐるんです、不意に、それも偶然に出會して、お嬢さんのお相手は一寸勤めかねます」

其の時撮影隊の一行が技師の方へやつて來た、監督は丁寧に頭を下げながら、

「お蔭さまでこれですつかり終りました。今週の金曜には封切り出來ますから、是非御覽を願ひたいと思ひます。尤も會
社ではなるべく早く上野原へは掛けるとか申して居ましたが——」

どうも色々とお世話になりました、何れすつかり片付けて後で事務所の方へ御挨拶にまわります」

監督との挨拶を機會に、奈良は芳子達に軽く、さよならと云つて事務所の方へ足早に立ち去つて行く。

芳子はあつげに取られながら、後を見送つてゐる。

「芳子さん出掛けましょう」

「え、」

「歸りは大垂水を越へずに與瀨から横濱の方へ折れて見ましようか」

山田が氣持ちを引き立てようとするいろ／＼の言葉も、芳子はかすかに答へて、トボ／＼と山田の後について行く、ふと後をふり返つた時であつた、奈良は主役の細田と何だか馴々しく肩を並べて歩いて行くではないか。

流石は「R K」社が、捜し當てたと自慢の秘藏女優丈けあつて、田舎娘には扮して居るが、仕事が終つて自分の姿に壊れた姿は、反對に艶麗に壞れて而かも氣高さを備へ、均整のとれた姿態に、足取りもみやびて、時々奈良に話しかける横顔はメーク・アップの爲めとは云へ、遠目にもクツキリと浮び出て、其の美しい眼、鼻、口、それに芳子の眼に寫つた細田はあゝ奈良と向き合つて笑つてゐる。

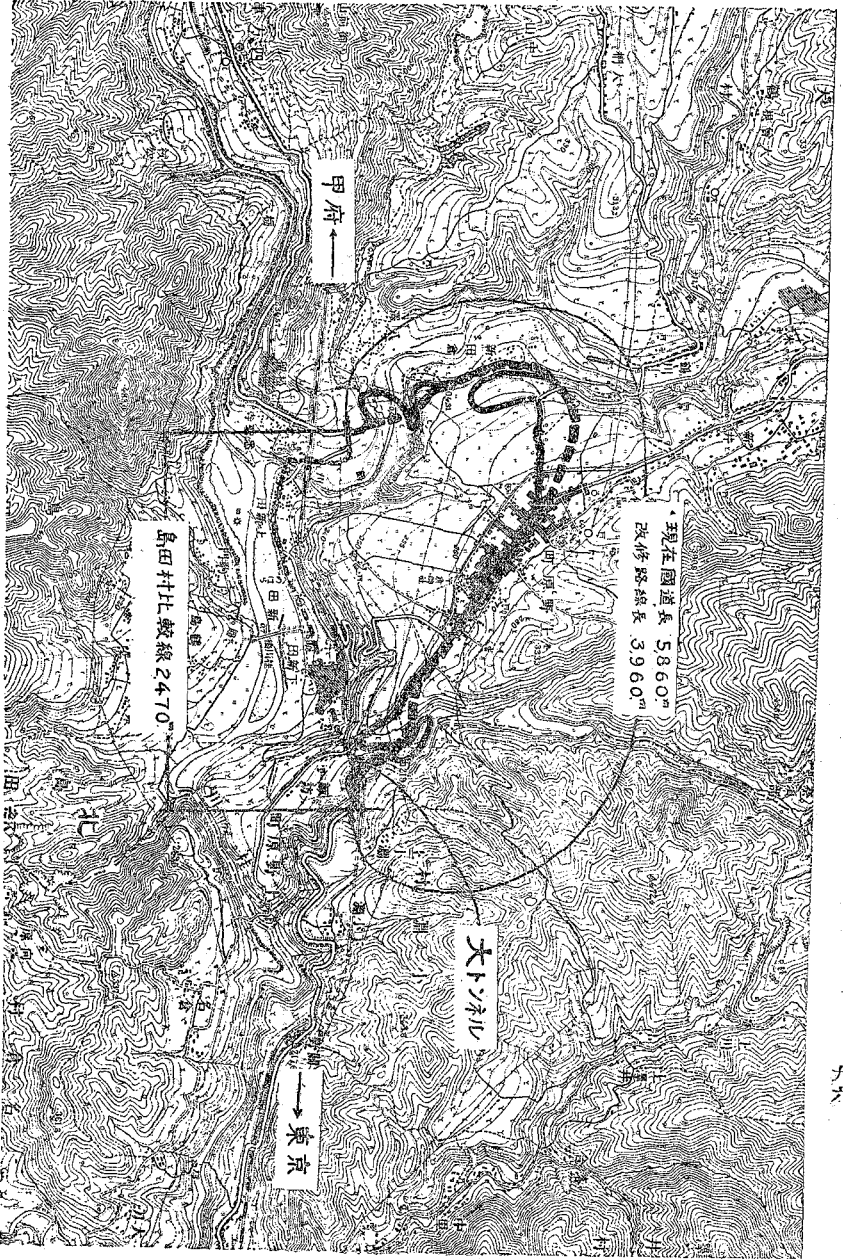
「とてもあの女優美人だね」

山田もそれに見とれてゐる。

「いゝわよ、お氣に入つたならばあの人に會つてゐらつしやい、妾一人で歸るわ」

芳子は小走りにかけ出した、眼には涙を宿してゐる。

三



内務省東京土木出張所は、上野原町に山梨國道改良事務所を置き、上野原に於ける國道の改良工事に着手した、工事計畫説明書を繕くと、

工事計畫説明書

(イ) 路線名 第八號國道

(ロ) 工事と執行する起終點

起點 山梨縣北都留郡上野原町大字井戸尻

終點 山梨縣北都留郡上野原町大字新田倉

(ハ) 工事執行の延長 三千九百六十米

(ニ) 道路の現狀

山梨縣北都留郡上野原町大字井戸尻より同縣全郡巖村に至る國道第八號線は、延長五千八百六十米を算し其間迂餘曲折甚だしく、大迂廻五ヶ所の外多數の屈曲箇所を有し、又勾配十二分の一の急なるもの、幅員狹少にして四米に満たざるものあり。

昭和六年度以來本國道に於ける他箇所改良に伴ひ、交通量頓に増加し、其最も不良箇所とも云ふべき此の區間に於ては甚だしく危険を感じつゝあり。

(ホ) 道路中心線決定の理由

本區間を改良せんには本設計に於けるが如く、上野原町を通過するものと、島田村を通過するものと二線あり。

島田村線は地形其他を考慮し、最短の路線を選ぶときは延長二千七百二十五米となり上野原線より短きも、東端に於て高約八十米の山脈に出會し墜道を以て貫通せざるべからず、加之鐵道墜道の以南に於ては、山頂に近き部分に於て之に並行に長約三百米、幅平均五十米、帶狀に十數年に亘り絶へず沈下しつゝありて現状に於ては約五米の差を生ぜる状態なるを以て、到底其下部に墜道を設け能はざるにより、鐵道墜道を越え路線を選ばざるべからず。斯くては墜道口に於て勾配取付地盤より三十四米の高さとなり、假に道路構造令の最急勾配を採るとするも、最高二十五米なる築堤を以て島田村の三分の一を横斷せしむることとなり、島田村を衰微せしむるに至るべし、上野原線は大迂廻を除くことにより、延長三千九百六十米となり千百米を短縮し、島田村線との差僅に千二百三十五米に過ぎず、而も上野原町沿道は凡て利用し得べし。

而して工費を概算するに島田村線約五十二萬圓、上野原線約三十二萬圓となり、其差實に二十萬圓にして距離線僅に千二百米、即ち東京甲府間百六十七軒餘の千分の七を短縮せん爲に、此の巨額を投じ而も前述の如く、大築堤並に墜道の維持費を加へ且つ島田村並に上野原町を衰微せしむべき路線は採用すべからざるより、本設計は上野原線を選び改修せんとするものにして、總延長三千九百六十米となる。

(一) 設計概要

幅員七米、有効幅員六米を標準とし、市街地は大部現在幅員八米内外あるを以て其儘とし、一部狭き部分を幅員七・五米に擴張す。

路面構造 砂利敷、舗装

最急縦斷勾配 十五分の一

最小屈曲半徑 九十米

切取は七分勾配とし法面には芝付を施工す

盛土は一割五分法とし法面には芝付を施工す

側溝は幅深共四十五糎の練石積とし市街地の一部はレ型側溝とす。

仕事が始まつてからの役所はとても忙しい、日曜でも祭日でも奈良には東京へ歸つて懐しい母の顔を見る事が出来ない、それで母親の方で日曜祭日には折々上野原を訪ねて、俸のやつてゐる仕事を見、其の日は少し早退けにして附近の名所や景色のいゝ所を母子肩を並べて散歩するのが習はしであつた。

上野原町の中心に近く、古い然し立派な建物がある、古の本陣であつたとか、今は其處に、明治天皇聖跡と記されて、道行く人の襟を正さしめてゐる。明治十三年明治天皇の御行幸のあつた所として昭和八年文部省より明治天皇聖跡として指定せられたのであつた。

母親を其處に案内して、玉座などを拜して、楽しみに語らひながら、二人は其の門を出て行く。

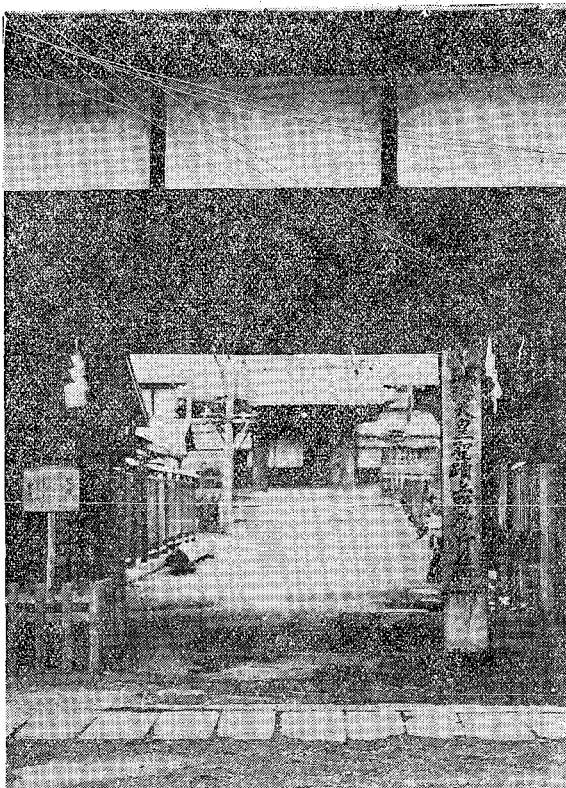
「それはそうと、芳子さんの問題ね、お前どうしても斷るつもりかい」

「えゝ斷つて頂きます」

「随分妙ですね、あれ程貰ひ度がつて居たのが、急に今度は向ふからは是非早く式を擧げたいと云つて來てるのを斷ると云ふのは」

「お母さん、お願ひだから、私の妻は私の好きな女を貰はしてくれませんか」

「それや、前から私がそれを承知してゐるんですが、芳子さんをお前が貰ひ度いと云つて居たのだし、それにお前も早く身を固めてお母さんに安心さして貰もたいのさ」



出して來た。「ねえ僕、入場券いらさないんだよ」

小供に勧められて三人はこの地唯一の大正座へ這入る。

「今だから云ふけれど芳子さんはちつとお母さんには向かない人だがね、——お前がほんとうに斷る氣ならいつでも斷りますよ」

話しながら上野原の町通りを歩いてゐる、町角には「上野原出身、細田和子嬢主演」と墨太々と記された、活動寫眞の旗がにぎ／＼しく建てられてゐる。

「あゝオヂさん、活動へ行かない、姉さんのだよ」

八つばかりの男の子が奈良の所へ飛び